

## 開催にあたって

宮浦富保

「里山」という言葉は最近盛んに使われています。里にある山だから「里山」と考えてもよいでしょう。「山」という言葉を「木が生えている場所」と考えれば、「里にある林」ということになります。「里」というのは、人が生活している場所のことですから、「里山」というのは、人の生活場所にある林ということになります。人の生活と密接な関わりを持っている森林、それを「里山」と呼んでいるというのが私の理解です。

里山というのは人間の生活と自然とが多様な形で関わっていた場所であり、人間と自然との共生の場であったと言うこともできるでしょう。ある種の生物の多様性が、里山を中心にして維持されてきたということも調べられています。例えば田んぼという生態系を維持してきたことによって、ドジョウとかタガメとかの生きものが、長い期間にわたって生存できたということがわかってきました。

カタクリという植物をご存じの方も多いと思います。カタクリは早春、他の植物がまだ葉を開く前に葉を開き、花を咲かせます。2カ月ほどして他の植物の葉が十分に開いてくる頃には、カタクリは姿を消してしまいます。枯れてしまったわけではなくて、春先のわずかな期間に稼いだ栄養物を根っこ（本当は地下茎）に貯め込んで、残りの10カ月をじっとして過ごします。この



図-1. カタクリの花

根っこ（地下茎）に貯め込まれたデンプンを取りだしたのが本来の片栗粉です。

カタクリが生存できる環境は、春先に十分な光を浴びることのできる落葉広葉樹林の林床（林の地面のこと）です。落葉広葉樹林は日本に広く分布していますが、それらの林のどこでもカタクリが見られるわけではありません。常緑低木とかササとかが生えていると、林床で生活しているカタクリは早春の光を十分に利用することができません。昔は色々な場所でカタクリの花を見られたと聞きますが、現在では見られる場所は限られています。

このあたりでは、滋賀県マキノ町（現在は高島市マキノ町）にある「近江かたくりの里」というところでカタクリの群生を見ることができます。この場所では、長い期間にわたって、椎茸栽培用の木を切ってい



図－2. マキノ町の「近江かたくりの里」

たそうです。椎茸用ばかりでなく、薪や肥料としても使われていたと思います。ほとんどがクヌギの木です。写真（図－2、口絵カラー写真 p. ⑦参照）のようにずんぐりとした切り株から数本の木がいきりと生えている姿が印象的です。このような面白い形をした切り株を、今森光彦さんは「やまおやじ」と呼んでいます（今森、2004）。長い期間にわたって人間が利用し続けている林は、林床の低木類が刈り払われて、歩きやすく、見通しが開けています。そのため、春先の光は林床まで届き、カタクリは日の光を十分に利用できます。

現在、我々の生活の近くにある森林である里山は、人があまり立

ち入らなくなっていました。昔の生活であれば、薪をとったり、肥料となる落ち葉を集めたり、里山に多くの人が入り、利用していました。人が利用しなくなった里山は、林床にササや低木類が繁茂し、樹木も混みあっていて、林の中は暗くなってしまう、春先に十分な量の日の光が林床へ届きません。このような森林の中では、カタクリのような植物は生存することができません。

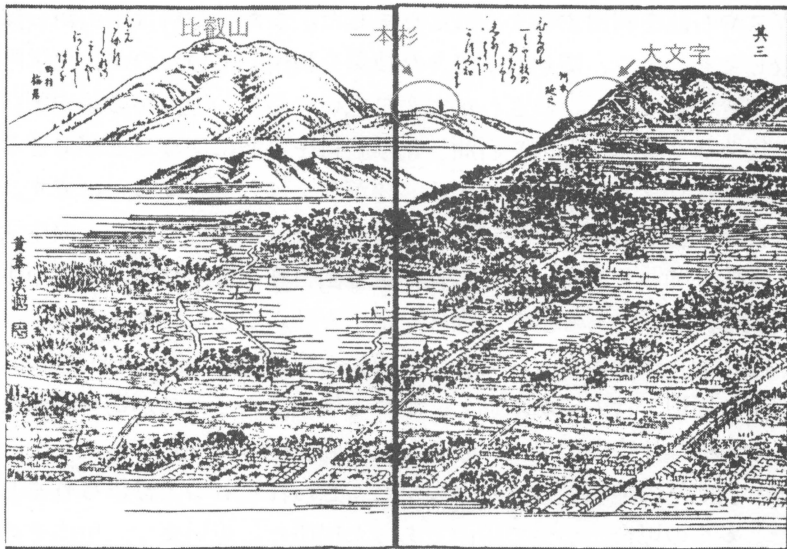
人が里山に入らなくなったのは、エネルギー源の変化と農業の形態の変化に原因があります。昭和30年代が大きな境目になると思いますが、それまでは煮炊きや暖房には薪や炭を利用していたのが、ガスや石油を利用するようになりました。また、肥料は里山から採取した落ち葉や、切り取ってきた枝葉を利用していたのが、化学肥料に変わりました。わざわざ大変な思いをして、里山から薪や肥料を集めなくても、ガスや石油、化学肥料を手軽に使うことができるようになりました。里山に入る必要がなくなってしまったのです。人びとの生活と里山との関係が切れてしまったわけです。人の生活と密接な関わりを持っている森林を里山と呼ぶとすれば、現在の生活環境の近くにある多くの森林を里山と呼ぶことはできません。

昭和30年代後半から、高度経済成長と呼ばれる時代に入りました。都市の周辺では人口が増加し、かつて里山であった林が切り開かれて大規模な住宅地になったり、工場や商店街になったりしました。また、郊外の地域ではゴルフ場がたくさん作られるようになりました。多くの場合、かつて里山であった場所だと思います。里山そのものがなくなったり、かつての里山とは違った森林に変わってしまったものもあります。

図－3は、小椋純一さんの「絵図から読み解く人と景観の歴史」（小椋、1992）という本から引用したものです。この本では、昔描かれた絵図を元に、その当時の植生を再現することが試みられています。非常におもしろい研究なので、ここでその一部を紹介したいと思います。

図－3の絵図は、1864年頃に京都の町の中から東山の方を見て描

いたものです。比叡山があります。それから大文字山があります。比叡山と大文字山の中間あたりに木が一本立っています。現在の地図で調べてみると“一本杉”という地名の場所に相当します。この場所に杉の木と思われる木が一本立っている様子が描かれているわけです。この一本の杉が目立つという事は、その周囲、比叡山の辺りとか、その手前の山には多分樹木がほとんど存在していなかったと思われます。では、この絵図に描かれている山々は何故このような木々の生えていない状態になっているのでしょうか。



図－３．京都市内から東山を望んで描かれた絵図  
小椋（１９９２）より

図－４は、田んぼでの農作業の風景を描いた絵図です（水本、2003）。大勢の人が描かれています。田んぼの中に、葉の付いた木の枝を投げ込んでいる人がいます。投げ込まれた木の枝を馬に踏ませて田んぼの中に鋤き込んでいる人がいます。田んぼの向こうの山には、木に登って枝を切っている人や、草を刈っている人が描かれ

ています。山から取ってきた木の枝や葉、それから草を田んぼの中に鋤き込んで田んぼの肥やしにするという農作業の風景です。このように田畑の肥料とするために、木の枝葉を鋤き込むことを“刈敷き”といいます。



図－４．農作業の様子を描いた絵図  
水本（2003）より

図－５は、「毎日草刈り」というタイトルのついた絵図です（水本、2003）。これも農作業の様子を描いたものです。水本邦彦さんの本の中には、農作業の日記が表にまとめられています。その表を見てみると、春から秋まで、野山に葉が茂っている時期のほとんど毎日といっていいくらい草刈りをしています。農作業というと畑を鋤で耕している光景を思い浮かべます。しかし、昔の農作業の日記によると、農作業の大きな部分を占めていたのは野山での草刈りであったことがわかります。図－５の絵図のタイトルどおり、毎日が草刈りの連続だったわけです。

毎日のように野山へ出かけて草を刈ってきて、田や畑に入れる肥料としていました。周りの野山から有機物を採取してきて畑や田んぼに入れる、ということで昔の農業が成り立っていたわけです。農家の周りには、草刈りのための草山や、刈敷きや薪をとるための森林が必要だったわけです。昔の農家の周りの山には、現在我々が眺める山々と比べると、生えている樹木はかなり少なかったと考えられます。

人が森林から有機物を採ってきて、燃料や肥料に利用するということは長いこと行われていたと思います。有機物の採取量や頻度が適度であれば、森林を持続的に利用し続けることができるでしょう。そして、そのように利用される森林は人間にとっても、そこに適応して生きるカタクリのような生物にとっても都合のよい環境であると思われます。

しかし、これが行き過ぎると、森林の回復は困難になってしまいます。滋賀県南部の田上山系には、その昔、ヒノキの大木がうっそうと茂っていたと言われています。田上のヒノキは良質の木材であり、奈良の都の造営や石山寺の建設に使われたという記録が残っています。その後繰り返し伐採が行われ、さらに薪の採取なども行われるようになったそうです。そして森林の利用はエスカレートして



図－5．毎日草刈り  
水本（2003）より

いき、松の根っこを掘り取って利用するというのも一部では行われていたようです。松の根っこには油分が非常に多く含まれていて、これを灯りに使ったそうです。

森林で一番大事なものは木でも葉っぱでもなく、土です。日本では、土壌が存在すれば木を全部切って、木材を全部持ち出して葉っぱも持ち出しても、やがて森林は復活してきます。ところが根っこを掘りあげるような利用の仕方をしてしまうと、根っこが土壌を保持する働きが失われてしまって、土がどんどん流されていくようになります。図-6は、1915年に撮影された田上山の風景です。田上山から流れ出した土砂は、草津川や大戸川を通して琵琶湖、瀬田川、宇治川とその周辺の地域に大きな被害をもたらしたそうです。明治以降、治山工事が精力的に行われ、現在では田上の山は緑に覆われています。ただよく見ると所々に岩が露出した所が見えます。元の状態に戻ったとは言い難い状況です。土壌を失ってしまうと、元の豊かな森林に戻すことは容易なことではありません。



図-6. 1915年当時の田上山

<http://www.bluemoon.kais.kyoto-u.ac.jp/>

森林からの有機物の収奪が過度になると、森林を破壊してしまう

ことになります。しかし、現在の日本で問題になっているのは、この反対のことです。生活に必要なエネルギーは石油や電気、ガスなどとして手に入るので、里山を利用する必要がなくなってしまうました。生活環境の近くに森林はあるが、生活とは無縁の存在となってしまうのです。

龍谷大学瀬田キャンパスは琵琶湖の南に位置しています。その瀬田キャンパスに隣接する里山を、我々は「龍谷の森」と呼んでいます。里山 ORC では、「龍谷の森」を活動の中心地と考えています。口絵航空写真（口絵カラー写真 p. ①参照）のように、名神高速道路や京滋バイパスが開設されたり、ゴルフ場や、大学、図書館などが建設され、瀬田丘陵の森林面積はかなり縮小してしまいました。龍谷の森のあたりは、まとまった森林の残る、貴重な場所になりつつあります。都市部の近くにある、大学が所有する森林ということも、龍谷の森の重要な特徴です。龍谷の森を活動の中心とし、滋賀県内あるいは近畿地域の里山を視野に入れ、里山での生物多様性の維持機構、里山と人間との関わりの歴史、現代社会における里山の利用などについて総合的に研究していきたいと考えています。

#### 参考文献

今森光彦（2004）、「やまおやじの木」、福音館書店、55pp.

小椋純一（1992）、「絵図から読み解く人と景観の歴史」、雄山閣、238pp.

水本邦彦（2003）、「草山の語る近世」、山川出版社、102pp.